

人間愛を貫ぬかれた中野渡先生

百 瀬 恵 夫 (政治経済学部教授)

中野渡先生は、何も仰らずに急逝されてしまった。すべての歯車が狂っている。先生を柱として、研究室や弟子達がすべて作動していたのに、あまりにも突然の重大事故で、屋台骨を失ってしまいなす術を知らない。

先生には、心残りのことが、沢山ありであったに違いない。しかし、何一つ御恩に報ゆることもなく、ご看病もできなかった私の心残りの方が、はるかに大きく悲痛である。

中野渡先生と私がお会いしたのは、昭和30年であるから、すでに27年が過ぎている。先生は私の青年期以後の人間形成の面で、最も大きな影響を与えられた恩人である。先生からは、経済学研究部で御教授をいただいたご縁で、今日にいたったが、教室やゼミでの関係でない間柄でありながら、私は公私にわたって最も多くの御指導をいただいた果報者である。

また、中野渡先生のゼミと私とは切っても切れない関係であり、中野渡ゼミの実態調査の多くの企業は、私がお世話させていただいた。その関係で、歴代の中野渡ゼミ員とは、実態調査を通じて永いおつきあいである。「産業社会における人間の行動」のテーマは、先生の最もお気に入りのテーマであり、すでに13回にもわたる大なる研究書にまとめられている。

先生がつねにご指導されたことは、「事実を知らなくては学問でない」ということである。理論と現実との関係を究明することが、先生の学問に対する基本姿勢であった。私は、これこそが社会科学を学ぶ者の研究態度でなくてはならないと思っている。中野渡ゼミの報告書も、昭和56年1月13日付の中野渡先生の序文が最後のものとなってしまった。その中で先生は、「福岡県 大川市の家具産地との関係が約20年前からであり、今日の大川市の発展は隔世の感がある」とのべられているが、この大川との関係も、私の秘書役によって始ったのであるから、先生との関係は実に長くかつ深かったことを改めて感じ入っている。

る。

中野渡先生とは、国内はもとより、南アジアや中国大陆の旅を共にさせていただいた。旅の目的や内容はさまざまであり、数えきれない回数を重ねたが、私は先生との旅を通じて非常に多くのことを学んだ。先生は、何事についても実に良くご存知で、すべてが驚くことばかりであった。先生は、知識だけでなく、智恵を与えて下さった上に、何よりも人間愛の思想を植えつけて下さった。

私は、中野渡先生のような、心温かな御人格者は、稀有の存在であると思っていた。先生は、人の気持や心を大切にされるために、いやということがいえない御性格であった。そのために、人一倍の御労苦を負われることも多かったのではないかと思われる。先生は、学生や多くの人のために、すべてを燃焼されて67歳の生涯を閉じられたように思われてならない。

先生は、明大生に対しては、とくに深い愛情をもって教育にあたられたために、多くの学生から絶大なる尊敬の念を寄せられていたのである。また、学生相談室のあり方や運営についても並々ならぬ情熱を傾けられ、相談室の中野渡先生の感すらあったほどである。すべてが、先生の学生に対する愛がその精神基底にあったからであると思われる。

また、先生は、金銭面でも実に清廉であった。いつも茶封筒にお金を入れておられ（先生が財布をもっておられたという記憶が私にはない）ゼミ学生に対してもよく支弁していることを数えきれないほど、私は目撃している。あえて失礼を許されるならば、先生は清貧教授であったように思う。

無欲で温厚なお人柄の中野渡先生をお慕いする人々が学内外に実に多く存在している。これらの人々の脳裡に去来するものは、人間中野渡信行先生に対する敬慕の念であり、人間愛の精神であろう。

中野渡先生の御恩に対して、私は何一つ御報いすることができなかった。私に残された先生に対する報恩の道は、母校の教育に専念し、人間愛に基づく教育に情熱を傾注することであると思う。先生の遺された人間愛の精神は、これからも私達の心の中に益々大きな力となって生きつづけるであろう。